get

Ａブロックにエントリーされた全１２作品を公開します。

覇者となったのは果たして誰？？

http://www.columnland.net/　にてごらんください。

便利な友達をGET

げっ、今日ってレポートの提出期限じゃん

つーかまだ全く手つけてないし…

とりあえず友達の丸写しでいいや。どうせばれないし

なぜ争いの時、それぞれにたくさんの「正しい信念」が存在するのか。そもそも、なぜひとは争うのか。

[Ghetto]

それはユダヤ人の強制収容地域。

そして、ナチスドイツによる強制収容所を指す。

悪者を作ることは自らの意見を正当化するのに、効率的かつ効果的な手段だ。

なぜなら、正当性の高いものに勝てば、それより高い正当性を得ることができるから。

倫理の教科書にも出てくるポパーも触れているが、科学の世界においても、正当性の高い科学理論は反証が提示されることが前提で、それを自らの理論に基づいて説明できること、つまり反証という敵に打ち勝つことで正当性を獲得していくことが述べられている。

実は、このようなことは、日常的にされていること。

たとえば、自分ではどうしようもないこと。

あるいは、自分に自信が持てないとき。

そんなときに外的要因に問題を帰属し、

それを攻撃することで心理的安定を得るということ。思い当ることはないだろうか。

歴史的に見れば多くの戦争だって、国の政策の正当性を証明するためではないか。

最近見られるテロ、民族紛争についても同様、自分の属する集団の同一性を実証するため。

そしてそれは、身近なところだと、誰かと言い争うことは自分の思考した内容の正しさを示すため。

…だけでない。そのとき、内省的な傾向の強いひとは自らの存在をそこに投象し、

「自分の正当性」をかけてその正しさの優劣を感じてしまうことがある。

たとえば、他人に強く言われたときに、自分の全人格を否定されたように感じること。

ただし、罪がない相手を攻撃はできない。

自分がいつ攻撃されるかわからなくなってしまうから。

自らの正当性をいうためには、正当なものを、正当な理由をかかげ争いに勝てばいい。

だからナチスは敵として、伝統があり、考え方が違い、少数民族であるユダヤを選んだのではないか。

だから、話が上手でなかったり、体がちょっと弱かったり、みんなと違う考え方や生まれた土地だったり、

あるいは争い事が好きでないような優しい子だったりが、いじめのターゲットになるのではないか。

そして、実は戦争は大多数の人にとって、わかりやすく言えば「ストレス発散」になっていると考えられる。

でも、そのために人が死んだり、苦しんだりするのを私たちはよくないことだと認識している。

いじめも、いじめる側の気持ちの充足のためにおこなわれているのではないか。

いじめることがよくないことを、私たちは知っている。学校でも比喩的に、世界史の授業で教わっているのだ。

解決のために何ができるか。

いじめが起こるところには、「いじめる側が悪い」だけでなく、いじめる側が安心できない環境が、そこにある。

それでも、自らの正当化のためのGhettoを、不完全な自分を補うためのスケープゴートを作ってはならない。

これまでの[Ghetto]のやり方ではみんなの安心できるいじめのない毎日は難しい。しあわせのために、私たちは相手ではなく、まず「自らの弱さを乗り越えていくこと」、=[Get over]していくべきではないだろうか。

GET OVER / MYSELF

「TARGET1900」

言わずと知れた英単語帳「ターゲット」。オレのさえない英語の成績を伸ばす最後のチャンス！絶対すぐに覚えてやる！そう意気込んで買ったのは十一月中旬。これからオレの〝ターゲット 1900 攻略計画〟が始まろうとしていた。

十一月、計画「1900(個)＝100(個)×19(日)」。報告「50(個)＋10(個)＋10(個)＝70(個)」。俗に言う三日坊主。失敗。

十二月、計画「1900(個)＝50(個)×38(日)」。報告「30(個)＋20(個)＋10(個)＝60(個)」。失敗。二度あることは三度あるということわざを思い出し、計画を立てるのに嫌気が差す。

一月、センター試験直前。切羽つまるという魔法にかかり、記憶力がぐんとアップする。「100(個)×7(日)＝700(個)」。成功。(センター失敗)。

二月、悔やみと焦りとが混じりパニクル。・・・何も出来ない。

本試験一日前、yべーよ・・・まだ半分も覚えてねーよ。焦りでなんだか頭が熱いよ・・・知ってるよオレのせいだよ。。あ～しょうがねぇ、、やるしかねぇな！「300(個)×1(日)＝300(個)」。成功。

合格証明書、GET。

栞〜F・M・N〜

「これ……借りっぱなしだった本……」
そっと彼に向けて差し出した、一冊の文庫本。なんだよプレゼント渡せよー、という周りの野次も私には遠い。目の前の彼は、どこか躊躇いがちにそれを受け取ると、ありがと、と複雑そうな表情を見せた。私は今、どんな顔をしてるんだろう……。

——本当に突然のことだった。今日という日のほんの一日前、一学期の終業式の日、彼の引っ越しがみんなに知らされた。その中でただ一人、私だけが周りに先駆けてそれを知っていた。そのさらに一日前、買い物帰りに、なんの気なしに、ふらりと彼の家の前に立ち寄ったから……。

——俺……引っ越すんだ、明後日……。

私が行った時、彼は両親や引っ越し屋さんと一緒に荷造りをしていた。何してるの？と震える声で訊ねた私に、しばし沈黙を置いてから彼は言った。多分、その時の私の反応は、嘘？とかいった感じだったんだと思う、よく覚えてない。逃げるように家に帰り、自分の部屋へ入った瞬間に溢れてきた涙の熱さと胸苦しさは、はっきり覚えているのに。

——伝えなきゃ。思い切り泣いたあと、そんな思いが不意に浮かび、私は枕から顔を上げた。目を留めたのは、彼から借りたままになっていた一冊の本。私は弾かれたように起き、財布を掴んで家を出た。

直接言う勇気なんて、私にはとてもない。でも、それでも伝えたい。明後日までなんて、どう考えても出来っこないけど、だからって何もしないで、このままただ見送るだけでいいはずない。この想いを、出来る限りでいい、不恰好でもいいから……。

向かった先は近所の花屋。小さな青色の花とともに家へ帰り、作業を始めた。そして今日、なんとか作り上げたそれを本に挟んで、私は彼の家へと走ったのだった——

「みんなといて、すっげぇ楽しかったよ。俺、みんなのこと忘れないから……」

車の窓から彼が笑い、そんな彼に、メールするからな、とか、元気でね、とかみんなが次々に叫ぶ。……その応酬が落ち着いた隙を見計らったように、アイドリング中だった車のエンジンが高まった。タイヤが地面を蹴り、彼の姿が動き出す。はっとして追いかけようとして、同じ事を考えたみんなの波に飲まれ、私は結局駆け出すことが出来なかった。胸が強く打ち始める。

——気付いて、くれるかな……。

あの本に挟んだ、控えめ過ぎる私の想い。彼があの本をまた開くかも、あの花の名前が分かるかも知らないのに……。でも、祈りたい。信じるなんて贅沢までは言わないから、だから、どうか……。

彼の車が——彼の姿が、視界から消える。

「郵便でーす！」

はい？とチャイムの音に応えると、若いお兄さんの声がした。扉を開け、ハンコを押して届け物を受け取る。なんだろ、この漫画サイズの包み。差出人は——

——鼓動が早まった。大慌てでその包みを開ける。そうして出てきたのは……あの時の本、その続編だった。何がしたいんだろう、彼は？　首をかしげながら、私はパラパラとその本をめくる。そんな風にして、真ん中ほどまで行った時だった。

……ぽろりと、何かが滑り落ちた。白い短冊のようなもの。栞？　それを拾い上げ、表を開けてみる——その、瞬間

「あ……」

……ぽろりと、何かがこぼれ落ちた。白い栞に丁寧に押された、小さな青い花。その下に書かれた三つの英単語が滲む——

「大丈夫に、決まってるじゃん……」

忘れたりなんて、出来るわけがない。

——そういうあなたこそ、私のこと、忘れたりなんかしないでよね？

手に入れたもの

手に入れたものは・・・命だった。
　親からもらったこの命　絶対無駄にはしねえ！
手に入れたものは・・・両足だった。
　一歩一歩地に足つけて　この道前へ進んでやる！
手に入れたものは・・・両手だった。
　死ぬまで俺は　ぬくもり誰かに伝えて生きたい！
手に入れたものは・・・この体と顔だった。
　たとえ誰かに不格好だと言われようが　不細工だと言われようが
　これが俺なんだ！　俺の自由じゃろうが！
　　お前には関係ねえ！

そして　手に入れたものは・・・この声だった。
　想いを伝える事ができるこの声で
　泥くさい唄でも歌って　ひとに夢と幸せを与えてゆきたい。
　そうやって我が道行く事　それが俺の夢。

「……よし！」
私は片方のヘアピンで、髪を挟んだ。
カーテンから日差しが差し込む。天気予報は外れたみたいだ。……卒業式の朝っぱらから、十七歳の小娘が悩んでいる、その原因は、たった一枚の紙切れなわけで――

〝マスコット・ギヴァー〟

事の起こりは、昨日に遡る。私は千花とクレープを齧りながら、他愛のない会話に華を咲かせていた。
そして話が、とある先輩の第二ボタンという、私にとって最も重要な話になったときだ、私は唐突に話しかけられた。
「やあやあ、お嬢さん！ 何か悩みごとでもありますか？ 随分と思い詰めた顔をしていますよ」
――そいつの服装は、まさに『ピエロ』そのものだった。顔には緑色のファンデーションが塗ってあって、頬には涙と、星をあしらったマークがついている。
「へぇ……なに、あなた、占い師なの？」
「いえいえ、そんな滅相もない！ 私のような未熟者に、人の運命を見るようなことは！ 私に出来ることといえば――
――あなたの人生に、少々の助け船を出すくらいのものです」
言葉と共に、一枚のカードが差し出された。その芝居がかった振る舞いに、なんとなく私は興味が湧いて、
「ふーん……けど私、そんなにお金持ってないわよ」
などと、つい言ってしまった。するとそいつは両手を広げる。
「金額などは問題ではありません！ お気持ちだけで結構。大切なのは誠意！ そう、誠意なのです！」
「誠意、ねえ……」
財布を覗くと、ちょうど一枚の百円玉があった。払うにちょうどよかったので、
「ま、私からの誠意としてはこんなものね」
と言って、私はそれを差し出した。
「むむ、これはなかなか手厳しい――ですが、確かに承りました！ では、お受け取りください」
……受け取ったカードには手書きで
『明日は晴天。神はあなたに贅沢な二択をせまります。赤いヘアピンからは愛情を、青いヘアピンからは勇気をそれぞれ、得ることができるでしょう』
と、なかなか達者な字で書いてあった。
「ただし欲張りはいけません。つけることができるヘアピンは、どちらか一方だけですよ」
そいつはカードを渡した後、そう付け加える。
（たしか、明日は天気予報だと、雨だったような……）
「いわゆる、縁起担ぎというやつです。お客さんも経験はあるでしょう？ そう、例えばですが……大切な試合の始まる直前には、決まった方の靴紐を結び直す、とか」
私は思わずドキッとして、天気のことを忘れてしまった。
そいつの言ったそれは、私の願掛けだったのだ。
「おや、心当たりがあるようですね。言ってみるものです」
そいつはニコニコと、屈託のない笑顔を浮かべていた……
……だが、ふと寂しそうな顔を見せると、言葉を付け加えた。
「……ですがこの縁起担ぎ、特に二択というやつは、実はとんでもなく、悪意に満ちているのではないかとも思うのです。選ばれなかった選択肢は、まるで選ばれた方と、世界の虚ろ側を通して、見えない糸で繋がれているかの如く、消えてしまうようで……そう考えると、私のやっていることは――」
その言葉は、私に対してのものではなかった。
しかし、私はそれを否定しなくては。私に示された二択は両方とも、失われては困るのだ。
「……そんなの屁理屈よ。繋がっているなら、そのまま引いていればいいかは、両方手に入れることだってできるはずだし、アンパンマンは、愛も勇気も手に入れてるじゃない」
理論もへったくれもなかったが、そいつは何も言わずに笑った。その笑顔はなんだか、太陽でも見ているようで……
「あなたは、やはり強い人だ。
そのカードを渡したのは、間違いではなかった」
その言葉と、そのあまりに真っ直ぐな瞳に、私は――

「ちょっと由加里、何ぼーっとしてるのさ？」
我にかえると、目の前には千花がいた。
「急に立ち止まっちゃって」
「え？ いや、今そこに……」
……だが指の示した先には何もなく、ただ路地裏が広がっているだけだった。幻でも見たのかと、私は思ったのだが――
「あれ？ 何それ？」
――右手を見てみると、例のカードが。
「…これ？ うーん……みょーちくりんな、ピエロの贈り物」

…口笛を吹きながら、『そいつ』は町を闊歩する。その目立つ格好にも係わらず、誰一人として、彼に注意を払うものはいない。……だが一羽の鳩が、彼の目の前に降りたった。
「ああ、どうも」
そいつは鳩に話しかける。
「珍しいですね。こんなところで会うなんて」
「なあ魔術師よ。あの娘は、どちらを選んだと思う？」
話したのは紛れもなく、目の前の鳩だった。
「おや、ご覧になって……彼女は、青を選んだと思いますよ」
「ほう、それはまた何故？」
「そっちの方が彼女に似合うから、ということです」
「なんだそりゃ」
そのとき彼らの前から、一組のカップルがやってきた。
二人の表情は、なんんとも幸せそうだ。
その女性の方の髪には青いヘアピンが――

「ね？ 似合うでしょう？」
「ははっ……ああ、確かに似合うな」

素晴らしい人生

Aは絶望的な表情で路地裏を歩いていた。それもそのはず、彼は数時間前に競馬で持ち金すべてをスったばかりだったのだ。そのとき、一人の男が前から近づいてきて何かを渡して走り去っていった。それは何の変哲もないただの箱だった。Aは落胆したが、とりあえず中を見てみることにした。

中は空だった。しかし、ふたの裏には「この箱の中に欲しいものを書いて入れればそれはあなたのものになります。」という文字が見えた。Aはばかばかしいと思いながら、「百万円」と書いた紙を入れてみた。案の定なにも起きない。Aがやはりと思い箱を閉じようとしたその瞬間、箱の中に何かがチラッと見えた。まさかと思い開きなおした。Aは自分の目を疑った。間違いなく百万円だった。

六ヶ月後、Aは嬉々とした表情で路地裏を歩いていた。いまAは人生最高の時を謳歌していた。すべてはあの箱のおかげだった。箱はAのすべての要求に完璧にこたえてきた。この六ヶ月の間に、世の中で幸せの要素であると言われる金、時間は有り余るほど得ていたし、家族も増えていた。まさしく人生最高のときだった。

一年後、Aは絶望的な表情で路地裏を歩いていた。一年前と違うのはその表情の原因と、箱を持っているということだった。Aは人生に絶望していた。この箱のおかげで、いや、この箱のせいでAは何の達成感もない人生を歩んでいた。Aは思案した結果、箱を捨ててしまおうと思ったが、どうしても捨てることができなかった。Aはさらに思案した結果、いま一番欲しいもの、「素晴らしい人生」と書いて箱に入れてみた・・・。

Bは絶望的な表情で路地裏を歩いていた。そのとき、一人の男が前から近づいてきて何かを渡して走り去っていった。それは何の変哲もないただの箱だった。Bは落胆したが、とりあえず中を見てみることにした・・・。

A-8

終わりと始まり

八戒という盗人がいた。八戒はいつも形のないものを盗んでいた。それは主に人の心であった。

八戒は世のため人のためという言葉が嫌いであった。

八戒は考える。この世の人間はみな、結局自分のことしか考えていないのではないか。もしそうなら、この世は滅ぶべきだ。

八戒は女好きであった。道中や町で気に入った娘がいればその娘の心を盗み、飽きれば殺した。

八戒は、人はみな必ず死ぬということを知っていた。八戒も人の子である。

八戒はこの国の民を憎んでいた。ゆえに八戒はこの国の混沌を望む。

ある日八戒は知ってしまった。町を取り仕切るやくざの親分でさえ平和を望むということを。八戒は、独りであった。

八戒はやくざの親分から平和の心を盗んだ。やがてやくざ同士の抗争が始まった。だが其の抗争は役人にあっさり鎮圧され、町は以前より平和になった。

八戒は焦っていた。故郷を滅ぼしたこの国がこれほど強固なものとは思っていなかった。

八戒はこの国を直接殺すことを考える。王の心を盗む。この国では、国家試験をトップの成績で通過したものは王の手にキスすることが許される。

八戒は目的のためには手段を選ばない。

八戒は猛勉強し国家試験に合格した。しかしトップではなかった。

八戒は何をするにしても自らやることを望む。この国を滅ぼせるのは自分だけだし、誰かに任せることなどはできないと考えていた。

八戒は王の側近となるため、よい仕事をした。とりわけ戦争が得意で、この国の危機的状況を2度も救っている。その功績が認められ、八戒は将軍職にまで上りつめた。

八戒は多数の部下を抱え、同僚からも上司からも頼りにされ、王と話ができるまでになった。八戒はいつでも王の心を盗める。八戒は迷っていた。

まもなく八戒は事を起こした。王は乱れ、大臣たちはみな抜け殻のようになった。結果、八戒はこの国を滅びる直前までにした。

だが八戒は病に倒れ、この国の最後を見届けることはなかった。

八戒は畜生道に堕ちた。

気づいたときには豚の妖怪となっていた。

He got what's coming to him.

smoke gets in your eyes

窓の外に雨が降る。こんな日には、心にあいた空虚な穴が痛む。

私は長い人生の中で多くの人とであった。そして二回の運命的な出会いをし、一人は私に道を示し、もう一人は私の心に穴を開けていった。

三十年ほど前だろうか、私は偶然に入ったジャズバーのカウンターで酒を飲んでいた。当時、私はただ漠然と社会に疲れていた。私がひどくつらそうな顔をしていたのか、先ほどまでバックバンドの前で歌っていた女性が私に話しかけてきた。私が黙っていると、彼女は「寂しい人」とだけ言い残し、さっさと店を出ていった。私ははっとして、ひどく苦しくなった。そして彼女に出会えたことを感謝した。次の日から会社に行かなくなり、家の電話回線を切り、家にこもっていた。スーツも名刺も庭先で燃やした。しばらくして私は例のジャズバーで働き始めた。気のいい店主は、私に一からカクテルの作り方を教えてくれた。そして毎日のように彼女は店に現れ、一曲だけ歌って、カウンターで一杯のカクテルを飲み、帰っていった。彼女は私がカウンターにいるのを見ると、僅かに微笑んだ。その微笑みで私は彼女に一目で恋に落ちた。私たちはカウンターとカウンター席の僅かに間をおいて毎日デートをし、結婚を決めた。彼女はそれまで日中に絵を描いて、夜はジャズバーを渡り歩いては歌ってお金を稼いでいたそうだ。それから、彼女はその生活をやめ（とはいえ、絵は相変わらず描いてはいるが）私とカウンターに並んで働き始めた。店主は初老だったので人手が増えて二人で働くのを快く受け入れてくれた。そして毎日のように妻は歌った。

カクテルというのは、見た目以上に難しい。酒の種類や調合の比率とかももちろんそうだけれど、それ以上にシェーカーの扱いが難しかった。今でこそすべてのカクテルを難なく作ることはできても、素人だった私には微妙な味の違いを理解するのに、三年ほどかかった。五年経って、始めてカクテルを一つだけ店主にほめられ、そのときからそのカクテルは私が作って出してもいいことになった。才能があったわけではないから、下積みは長かったけどそのときにすべてが報われるような気がした。

ある雨の日、私はそのカクテルを、始めて客に出した。彼女は黒いドレスを着てカウンター席の一番ドアに近い所に座っていた。彼女は目を閉じ、何を注文するでもなく、ジャズの演奏に耳を傾けていた。私は彼女のその姿に見とれていた。妻とは違った魅力を持つ人だった。私は不意に私のカクテルを飲んでもらおうと思った。そのカクテルできっと私は、彼女の核心に触れ、同時に彼女に対する「何か」を吹っ切れると思った。私が彼女の前にそっとカクテルを出すと、彼女は一口だけ私のカクテルを飲んで、また演奏に耳を傾けた。そして、その姿はまるで泣いているように見えた。彼女は鞄からつぶれた煙草の箱を取り出し、一本の煙草をくわえ、なれない手つきでそれに火をつけた。そしてまた目をつぶった。その目から一滴の涙が落ちる。きっと煙草が目に染みたんだろう。私はその煙草の煙が消えた時には、その涙も雨で流されてしまうことを心から願った。

彼女は口紅のついたグラスと雨のにおいを残し、店を出て行った。

やがて店主は亡くなり私が店を継いだ。私の髪はすっかり白くなり妻もしわが増えたが、似合いの夫婦だと思う。人の人生は、人と出会うことで、そしていくつかの運命によって作り上げられていくものだと、つくづく感じさせられる。妻と出会えてよかった。そしてできればもう一度、あのドレスを着た彼女に出会いたい。

窓の外に雨が降る。ドアが開くたび、雨のにおいが店を埋め尽くす。こういう日には、煙草がよく似合う。

学生時代の昼時

いつものように机の周りに4人が輪を作って騒いでいた。

「よっしゃー。勝ったー」

活気にあふれる少年が2枚のカードを捨て喜びながら言った。

「一抜けた～昼飯ゲット～♪」

などと言い捨てながら机の輪の中からはずれた。

「くっそーまたあいつ一位かよ～」

悔しそうに隣の人が言った。

「でも誰がもってるんだろ…」

また隣の人がつぶやいた。

「軽い心理戦だよなこれ。てかマジ誰がもってんだー？ってウワッ」

「あ、引いたね？」

「ん、んなわけないだろ～俺がそんなヘマやらかすわけねぇだろ。」

（分かりやす…）

3人がせせら笑う。

「さっ、さぁ来いよ。」

慌てながら言った。

そして時間がたち…

「はい。おーわり。」

「くっそーまた俺の負けかよぉ～。」

「ほんと弱いよな～お前。」

「く…今日は調子が悪かったんだよ。明日はぜってぇー俺が勝ってやるよ。」

などと吐き捨て昼飯（パン）を買いに行った。

「あいつババ抜きほんとよわいから昼飯代ういていいよな～♪」

「負けるといつもあの言い訳いってくよねー。」

「だよなー。あいつ顔に出るからマジわかりやすいし。」

勝ち組の3人が笑いながら負け組の一人のことを話していた。

五月中頃の日曜日、都内某所の建物の入り口で僕は戦いが始まるのを静かに待っていた。敵の数はおよそ百、皆百戦錬磨の猛者たちだ。僕はこの敵全員を一人で相手にしなくてはならないが、だからといって逃げ出してはいられない。僕はこの戦いに生活のすべてをかけているのだ。

戦闘開始を告げる合図とともに、僕はある場所を目指して建物の中に駆け込んで行った。敵たちも後ろから追いかけてきたが僕の方が一歩リードしていた。ところが、目的地に着いてみると敵の二十名近くがすでに到達し、二十五玉限定、一玉三十円のキャベツの山に群がっていたのだ。近道でも知っていたのか、さすがは百戦錬磨の猛者たちだ。しかし、関心してばかりもいられない、僕も早速目標（キャベツ）の確保に向かう。しかし敵の壁は厚く、押し合いへし合いの中でなかなか目標（キャベツ）を確保できない。弱い者は次々と後方へと押しやられ、強い者は前方の敵を排除しながら突き進んで行った。僕が中盤でもたつくうちに、ついに目標（キャベツ）も残り一つとなり、目的を達せられぬまま終わってしまうのかと思ったとき、頭上前方で取り合いとなっていた目標（キャベツ）がなんと敵たちの手をくぐり抜け僕のもとへと落ちてきたのだ。この機を逃さず目標（キャベツ）を両手にしっかり抱え込むと、僕は敵の追撃を振りほどいて一目散にレジに飛び込んでいった。レジで三十円を払い、ついに僕は目的を達成したのだ。

帰り道、財布の中を覗くと二円だけ残っていた。仕送りが振り込まれるまであと十日、これでなんとかやって行けそうだ。今日の夕飯は、・・・塩キャベツにしよう。

【激安スーパーでの戦い】

A-12

ドーナツは回りがふちでできた穴

ガラガラガラ…

教室中の視線が一斉に俺に向く、と同時に「脅かすなよ」と言われた。どうやら教官と思われたらしい。いや別に脅かしてないし。そりゃ時間ぎりぎりに来て前の扉から堂々と入ってきたのは悪かったけど…。

前学期も終わりに近づいてきて段々と期末試験が始まっている。いつもと違い緊張感の漂う教室に入って初めて、いつも睡眠学習していたこの授業が今日単位をかけた試験があることを知った。講義は異常に楽なのだが試験が非常に独特なのだ。先輩から聞いた話によると解答用紙は白紙のＡ３用紙一枚。例年何かしらのお題が与えられ、それについて論じるらしい(確か去年は人生について)。その一枚に書ければ字数などの形式は不問だが、たくさん書けばいいのではなくお題について的確に答えているかを見るらしい。だからまじめに書けば単位は来るが得点は伸びにくいと評判である。一応来年の学科所属の点数には入るはずだが他で十分カバーできるし元から暇潰しのつもりで取ったから落としても気にはしない。とりあえず試験が始まるまでは周りの奴らと昨日の巨人戦について語ることにした。

ガラガラガラ…

二度目のガラ音。今度は本当に教官のお出ましだ。緊張が走る。まずは解答用紙が配られる。配られたらまず名前を書くのは基本だ。全員に行き渡ると教官はお題を黒板に書き始めた。カッカッカとお題を書く音は聞こえるが教官の背に隠れて字が見えない…邪魔だよ教官。ようやく黒板が見え、そこには『勇気について論ぜよ』と丸っこい字で書いてあった。

…あれ？それを見た瞬間すごい解答が頭をよぎった。しかしある意味ふざけていると思われるかもしれない。しかし途中退室可だから残った時間を有効に使える。しばらく悩み両者を天秤にかけた末、俺はさっさと帰ることにした。試験開始５分後。おれは颯爽と教官に解答用紙を持っていった。他のやつらは頭を抱えて悩んでいたため教官は俺がこんな短時間で終わって不思議そうな顔だった。そしておれの解答を見るなりすごく驚いた顔をしたがすぐにそれが笑顔に変わって「よろしい」とだけ言った。やり直すのかと思ったが意外にすんなり終わってしまった。俺の答案に書いてあったのは一言

これが勇気だ

後日俺は史上最高の成績で単位をＧＥＴしたことを知った。

コンテスト結果

[Aの部]

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
		まじょコメント		
A01	便利な友達をGET	2 pt	8 位	0 sp
		いやもう、このナナメの前のめり加減にシビれましたね。ガケップチ人生気分がひしひし。 しかし、３文字ネタはさすがにみんな飽きてきたので、よほどグレイトでないと載りませんよ、後続の作者さまがた。（ex.「東」「ガラス」）		
A02	GET OVER / MYSELF	3 pt	6 位	0 sp
		ゲットからゲットーへ、連想はすぐ働くけれど、重いなあ、とたいてい引き返してしまうところ、敢然と挑んで、ゲットオーバーの扉を開いた力業でした。その敢闘精神を称えます。 ただ、こうした正々堂々と論ずるという内容ならば、直球勝負が身上で、ならばレイアウトはシンプルなほうが良いのでは。字体やフォントを変えて緩急を付けようという配慮だったと思うのですが、何だか講義ノートのようで、かえって読みにくくなってしまった感があります。個々の考察は、きちっと説得的な言葉で書かれているのに、もったいない。 それと、論点のメインは「いじめ」解決ですよね。その論点が出てくるのが半ば過ぎ。ポパーへの寄り道はやめて、もっと早く本題に入ったほうが、より強い説得力を持ったかな、と思います。		
A03	TARGET1900	6 pt	5 位	5 sp
		70+60+700……思わず足し算してしまいましたよ。まず、その「数」での見せ方が巧い。 そして、一見日記スタイルなのですが、ブログで流行のゆるい文体とは対極の、「失敗。成功。」と簡潔な報告書風の文体がここちよく、「知ってるよオレのせいだよ」に爆笑。そんな語り口も秀逸でした。 さらに内容のおもしろさ。覚えた単語の数と周辺状況がシンクロしていたり、いなかったり。そんなものですよね。受験戦争の浮き沈みをしっかり体感させてGETと力強く着地、おみごとでした。 特別賞：よく受かったで賞/なんとなく共感しちゃうで賞/ターゲット1900賞（ターゲット1500はどうした）/本当に１日で300単語覚えられたので賞!?（合格おめでとうございます）/なつかしいで賞　ということで、みなさんの懐かし気分を味方に最多特別賞ゲットです。おめでとう！		
A04	栞～F-M-N～	12 pt	3 位	1 sp
		すてきですよね、おとめちっくですよね。本の続編を贈って、そこにはらりと忘れな草。秘められた思いが、ふわりと広がります。男子校育ちのみなさまは、こんな乙女心get法もあるのだ、とぜひ御参考に。 車が走り出すシーンとか、ほんと文章力あって巧いなあと賛嘆しつつ、やはりちょっと書きすぎでしょうか。引っ越しシーンなどは思い切って削って、もっとスリムにすると青い花の可憐さがより際立った気がします。 特別賞：百万人コードひっかかってるで賞（普通の人には通じません） ＋A-14班より特別賞その２として「解決したでしょう」（題名の意味がわかって感動した！）		
A05	手に入れたもの	1 pt	10 位	0 sp
		命に両足、両手に顔、ひとつひとつ自分の持ち物確認！ たくましい決意を語って、歌詞にでもしたいようなすがすがしさをGetです。 唯一、「お前には関係ねえ！」がギモン。おお、がんばれよ、と読者は応援姿勢に入っているのに、何もここでケンカ売らなくても。勢い余ってということでしょうか。それならOKかな。		
		12 pt	3 位	1 sp

A06	マスコット・ギヴァー	ちょっと気取った哲学セリフをしゃべるピエロ君にぞっこんです。「二択は悪意に満ちている」なんて、なかなか深い。それにしっかり切り返しちゃう由加里ちゃんもエラい。 で、この作品のメッセージって何なのでしょうね。人生、どちらを選んでもどうにかなるものさ、ケ・セラ・セラ！？ 特別賞：力作賞		
A07	素晴らしい人生	15 pt	2 位	0 sp
		さよなら箱入りの人生。 アイディア秀逸です。できごとだけを連ねてゆく構成もきっちり骨太に完成されています。 そんなワザを堪能しつつ、ここで、「箱」の気持ちになってみた。箱のない素晴らしい人生を箱が実現してくれる。うーん、箱の自己犠牲、むしろ箱の自己増殖？？ 教えてください箱のキモチ　＜作者さま		
A08	終わりと始まり	1 pt	10 位	0 sp
		猪八戒となる前の知られざる前史。歴史物風にたんたんと語られているところが味わいで、特にマジメに国家試験の勉強しちゃう八戒くんがユーモラス。 「キス」とか「トップ」っていう言葉も、中国古典風に重々しいほうが似合うとおもいますよ。「接吻」「首席」		
A09	smoke gets in your eyes	3 pt	6 位	2 sp
		煙が目にしみる。スモーキーなジャズバーの雰囲気が漂ってきます。 ただ、黒いドレスに惹かれるオトコゴコロが理解不能。不要な（と思われる）前半をカットして、黒ドレスさんの魅力をもっと描き込みたい。「妻とは違った魅力」なんて地の文章で説明してしまったら負けですよん。 それにしても、エメラルドに腕にカクテル。三週連続登場で、これだけ作風チェンジができる作者さん、タダモノではありませぬ。 特別賞：大人で賞/ハードボイルド賞（しぶい） イチオシフレーズ：「こういう日には、煙草がよく似合う」×２		
A10	学生時代の昼時	0 pt	12 位	0 sp
		シンプルな心理戦。お人好しさんの負け。わかりやすい展開で親しみが湧きます。 もう少しキャラクターを描き分けつつ、お人好しさんのリベンジ編なんて加えると、より変化が出て、おもしろかったのでは。		
A11	激安スーパーでの戦い	2 pt	8 位	3 sp
		ターゲットはキャベツ。その言い換えが楽しい。ルビ機能をちゃんと使って、手書きじゃなければ、もっと良かったのに。 財布に２円、に爆笑です。おだいじに。 特別賞：キャベツで十日はムリ賞（切迫感が伝わった）/話がもりあがったで賞/安すぎるで賞（キャベツはレンジでチンするとおいしい） イチオシフレーズ：「目標（キャベツ）」		
A12	ドーナツは回りがふちでできた穴	33 pt	1 位	3 sp
		ついにジンクスが打ち破られる日がやってきた！　賞品作品、初のベスト３入りは圧勝首位で飾られました。 なんと言っても「これが勇気だ」が大インパクト。 試験という親しみやすい状況設定で、あこがれのミラクル達成。一度はやってみたいよね、と読者がキモチを乗せやすいつくりにしたところ、業師だなあ。おめでとう!!! タイトルもぴたりはまりました。ふむう、作者さんは桜庭一樹の愛読者？ 特別賞：タイトルの意味がどうにも分かりにくいで賞/ガラガラで賞（こんな教授がいてほしい）/その度胸が欲しいで賞 イチオシフレーズ：「これが勇気だ」×９　「ドーナツは回りがふちでできた穴」×２で、案の定イチオシフレーズ大賞もさらいました。		

[Bの部]

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
		まじょコメント		
B01	ゲット	3 pt	8 位	0 sp
		明日こそは。夜眠る前の気持ちをさらり綴って好印象。 つぶやきが小さな決意へと結晶してゆく流れが、とても自然で読者が気持ちを乗せやすいです。 タイトルは一工夫したかった。 イチオシフレーズ：「今度はどこにでかけよう」		
B02	ANDREW, THE ECCENTRIC BIRD!!!	24 pt	2 位	0 sp
		重々しく語りつつ、けっきょくベルばら起源と気づけずにいるアンドレ君のキャラクターがサイコーです。 でもってこの作品は、名前というものは、人（鳥）にとって存在の根源にあたるものなのだから、テキトーに付けてはいけないよ、という動物愛護運動の一環と見た！（ウソ） うーん、よかったのになあ。敵がドラクエでなければ。。。		
B03	一番欲しかったもの	7 pt	4 位	0 sp
		長い人生のはずなのに、キレの良い言葉で、さくさくと。その展開が心地よかったです。たんたんと語ることで悲劇性も伝わってくるのですが、ただ、彼女がただのモノ＝受け身になってしまっているのが残念。 彼女にも出番＝役割があると、もっとドラマのふくらみが増すのでは。		
B04	人生、有頂天になったもの負け	4 pt	5 位	3 sp
		苦し紛れの「げっ泊」が笑えました。ドクロにヌリカベ、あちこちの小ツッコミも楽しく、お約束の展開ながら痛快。 特別賞：ドタバタ賞（ドタバタ具合が良い）/マザコン賞（セリフがいい）/サムイ賞（ギャグがサムイです） イチオシフレーズ：「来ちゃった（はあと＆どくろ）」×２ 「げっ泊まりに来たの!?」×２　「俺『達』（←敢えて）は熟女好きの烙印を押されてしまう」「ぬりかべメタボリックばばぁ」×２　と、7班制覇の圧勝でイチオシフレーズ大賞ゲットです。		
B05	動いてポン	2 pt	9 位	2 sp
		英単語のニュアンスを感覚でとらえよう作戦。 豆知識をゲットしつつ読めるという親切設計がうれしいです。この夏、いいことありますように。 特別賞：コラム賞（コラムとして、うまくまとまっているから）/マスターボール賞（ポケモンの引用） イチオシフレーズ：「ポケモンゲットだぜ！」×２　「動いてポン」		
B06	RESET	0 pt	11 位	0 sp
		億千万の明かりの中に舞う紙吹雪。ステージのような鮮やかさの中、強い言葉の独白が響きわたります。 ただ、「違ったね。私とあなたは少しだけ」のくだりが良く分からなかったです。彼は飛んだ、でも私は飛ばない、ということ？ イチオシフレーズ：「私もみんなもがんばればきっと光り輝く何かが出来る」		
B07	出現	26 pt	1 位	2 sp
		アレックスにダマされました。なるほど、勇者の敵側に立った視線、ということなんだ。クリスの妹がかわいそう……（問題はそこじゃない） 正義は世界にただ一つじゃない。勇者づらした偽善者の仮面を引き剥がせ！　遊びつつそんな哲学をこっそり読みとってみたりして。 何はともあれ、みなさまのドラクエ心をしっかりゲットして、アンドレをかわしての首位、おめでとうございました！ 特別賞：LV.up賞/せいすいは意味がないで賞（ドラクエ好きです！）		
B08	給料日3日前の思考	2 pt	9 位	0 sp
		お金ゲットの三段活用。ポンポンポンとリズミカルに展開して快調。つくっちゃえ、まで行ったところが、この大学らしくもあり。 ああそういう状況だったのね、とすっと落としたラストですが、この作品の場合、タイトルは冒頭のほうが、よりせっぱ詰まった感が伝わっていいと思います。		
B09	呼応の動詞	14 pt	3 位	0 sp

		「手は手でなければ洗えない」――印象的なフレーズで、くいっと引き込まれて、幸せラストへ。表紙作品でも行けそうなここちよい展開でした。 ただ厳密に詰めてゆくと、give and take　の骨格が 与える←→得る 失う←→得る と二通りに発現しているようで、混乱しました。もう少し整理してもよいのでは。
B10	Get	4 pt　5 位　0 sp マジメに語っているようでいて、オチに走ったラスト。そこの崩し方が狙いだったのかもしれませんが、読んでゆくと、途中で勢いが止まってしまった感があります。どちらかの路線にしぼったほうが良かったのでは。 ラストは、明日は我が身、というブラックなシメなのかな、と読みましたが、どうでしょ？ イチオシフレーズ：「単位です」
B11	さいごに得たもの	4 pt　5 位　1 sp マッチ売りの少女リストラ版。結末が悲しいです。定期券が切れる日だった、なんていう設定のつくりかたにしみじみ。あとは女性のセリフをもっと短く自然に。全体ももう少しスリムになるはず。 これもタイトルがラストである必要はなさそうですが。 特別賞：世にも奇妙で賞
B12	GET＝	0 pt　11 位　7 sp 英文字タテガキにいちばん労力をかけたと見た！ 川柳、ですかね。おあとがよろしいようで。 特別賞：エビせんねらいすぎで賞/景品が欲しかったで賞/そろそろやめま賞/テクニカル賞（俳句になってる）/エビセン狙いで賞/パクリはもうやめま賞/前回を意識したで賞　おぉ、エビせんはゲットできなかったけれど、最多特別賞ゲットです、おめでとう！ イチオシフレーズ：「ごめんなさい、エビセン取る手がとまらない」×２